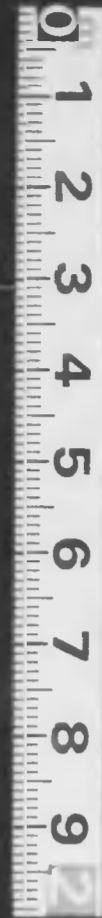


週寫眞
報

情報局編輯
三月三日・第二六一號・十七



『太平洋戦線のもつとも重要な作戦は
日本自身の空の上に展開されるであらう』と

ルーズヴェルトがわめいてるる

待つあるを待むわれらに

何の威嚇となるだらう

われらの水と砂と蕙と

鬪魂とで

見事に一泡ふかしてやらう

「時立の札」に載る大規模な空襲の模様

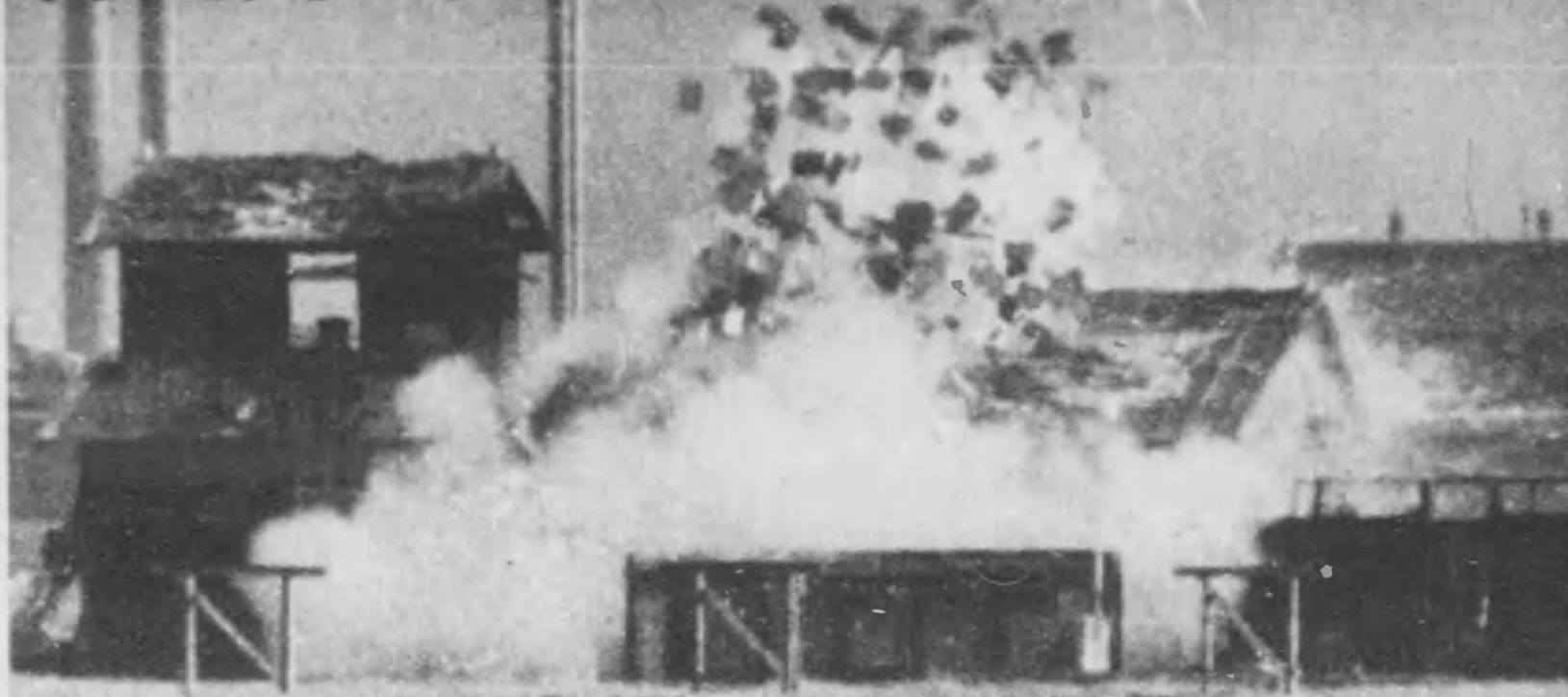


大規模な空襲の模様

大阪新淀川公園における五十キロ黄燐焼夷弾炸裂の瞬間。炸薬の爆発とともに黄燐も爆発燃焼して白煙をあげ、火沫は七十メートル附近まで飛散した。

撮影
大阪新聞社
小石
中藤
教清

大規模焼夷弾は消滅した



—阪大— 米國大規模焼夷弾の威力と消火の試験

〇黄城二十キロ口弾爆燃の瞬間

黄城二十キロ口弾および同五十キロ口弾を假設家屋内に爆発させ、隣組員による消火状況を調べてみる。先づ最初は平屋建六疊の間に二十キロ口弾を爆発させた。炸裂した瞬間、大なる白煙が天に押し、建物は大破、いかにも大火災のやうな観を呈したが、男女十一人の協力で直ちに出勤、手際よく消火に努めた結果、水を約五十斗、砂若干、黄口二木、火叩き数本を用ひ、實際の防火活動は一、五十秒で消火してゐる。これをもし出勤が遅れた場合はどうか。平屋建六疊の間に五十キロ口弾を爆発させたところ大音響とともに猛烈な白煙をあげて家屋は倒壊した。爆発一分後に男女十一人の隣組員が消防活動に移り、バケツ注水と小型ポンプの消火によつて大火までには五分十四秒を費してゐるのである。なほこれに使用した消防資材は水七斗四升、黄、砂若干、黄口三本、火叩き五本であつた。

〇黄城五十キロ口弾爆燃約三分後の消火状況



敵は昨年四月十八日の日本本土空襲の経験に基づき、あらゆる角度から有効な空襲方法を研究してゐるといふは、なかでも最も警戒を要する點は、今後恐らく二十キロ程度以上のいはゆる大規模焼夷弾の威力を試みようとするといふことだといふまでもなく、木造建築物の多いわが國にとつて、焼夷弾は最大の敵であるが、果して敵焼夷弾は敵の夢想する如く東京や大阪などを焦土と化すことができるだらうか。われわれはまづ今後使用を豫想されるこの未知未見の大規模焼夷弾の正體を正しく見極めるとともに、これに對する萬全の防衛態勢を確立しておくことが絶対に必要だ。

日本産業經濟の中心である大阪では、府市共備で二月十四日、大阪師團指導の下に大阪新淀川公園に木造瓦葺家屋三棟四戸をはじめ着火試験



敵は昨年四月十八日の日本本土空襲の経験に基づき、あらゆる角度から有効な空襲方法を研究してゐるといふは、なかでも最も警戒を要する點は、今後恐らく二十キロ程度以上のいはゆる大規模焼夷弾の威力を試みようとするといふことだといふまでもなく、木造建築物の多いわが國にとつて、焼夷弾は最大の敵であるが、果して敵焼夷弾は敵の夢想する如く東京や大阪などを焦土と化すことができるだらうか。われわれはまづ今後使用を豫想されるこの未知未見の大規模焼夷弾の正體を正しく見極めるとともに、これに對する萬全の防衛態勢を確立しておくことが絶対に必要だ。

日本産業經濟の中心である大阪では、府市共備で二月十四日、大阪師團指導の下に大阪新淀川公園に木造瓦葺家屋三棟四戸をはじめ着火試験

五十キロ口弾（左）及び油脂焼夷弾（右）の實物。黄城焼夷弾は機銃の弾殻の内部に黄燐を埋めたもので、黄燐とは常温では黄色の固形物である。空気に觸れると自分から着火する性質があるので、普通は水中に保存しておく。燃焼の際には熔けて青白い光を放つが、再び水中に入れると消火して常態に戻る。有毒で皮膚に附着すると悪性の火傷をうけるから、消火の際には皮膚を露出しないやうに注意しなければならぬ。この種の焼夷弾は落下して物にぶつかると信管が働き、炸薬が爆発して内部の黄燐を飛散させる。また油脂焼夷弾は同じく機銃の弾殻の内部に油脂とアルミナを埋めたもので、油脂の燃焼を助けるため弾頭部と弾體の間にアルミナが埋めてある。落下して物にぶつかると信管が働き、アルミナが着火して着火する。

材料、待避壕その他動物的試験用材料設備をとり、支那前線で押収した米軍焼夷弾を使用して、これに對する威力試験と隣組防空群の挺身作業による防火試験を行ひ、種々貴重な記録を収めたが、この試験の結果、大規模焼夷弾による火災といへども各人が必勝の信念をもつて協力一致、集團の能力を發揮して敢闘するならば、斷じて必滅し得るものであることが三十万觀衆の前に實證された。

以下、試験の結果より得た大規模焼夷弾に對する大體の対策を述べて一億必勝の備へを勧めしよ。

一 敢闘精神の昂揚

どんな優秀な資材や器具を持つてゐても敢闘精神が缺けてをれば火勢に負けて小事も大事に至る結果となる。火焔はどんなに猛烈であつても、これは駄目だと早合點せず、無身火點に突進して敢闘すれば絕對鎮壓できるのである。

二 防火用水の多量確保

水はすべての焼夷弾による火災の延焼防止上、最も有効である。特にこれまで無効と認められてゐた油脂焼夷弾に對しても有効であり、この點、従来の觀念を修正しなければならぬ。防火用水はできるだけ澤山欲しいのであるが、大體の標準とし

〇油脂二十キロ口弾爆燃の瞬間

油脂二十キロ口弾および同五十キロ口弾をそれ／＼假設家屋内に爆発させ、隣組員による消火状況を調べてみる。まづ二階六疊の間に爆発させた二十キロ口弾では着火と同時に二階兩側の壁は吹飛び猛烈な黒煙を吹き出したが、男女十一人の協力で着火後十秒以内に出勤して消火に努めた結果、二分五十秒で鎮火、これに要した資材は水が一石五斗、黄一枚、砂若干であつた。次いで行はれた二階建下六疊の間における五十キロ口弾の消火活動では、着火と同時に大音響とともに天井が吹飛び室内は一面火の海となつて猛烈な黒煙を吹き出したが、この火勢にひるまず男女十一人が協力して一分後活動を開始した結果、實際消防時間三分三十五秒で鎮火してゐる。これに要した水は約二石二斗であつた。

〇油脂五十キロ口弾爆燃約三分後の消火活動



黄燐二十キロ弾および五十キロ弾を野外で爆破させ、その附近においた種々な供試材料に及ぼす威力を試して見る。まづ二十キロ弾では火法は五十メートル附近まで飛び、五十メートル以内の可燃物、即ち障子、窓等は全部着火してゐるが、ガラス戸、板戸には火法が着いても着火してゐない。なほ十メートル以内には供試された衣類は黄燐の附着した部分が焦げてをり、また五メートル以内には供試された衣類は生命には別害なく、二十メートル距離の兎は何等異常な状態がなかつた。次いで行はれた五十キロ弾の試験では、火法は七十メートル附近まで飛び、二十五メートル以内の障子、窓等は殆んど着火したが、雨戸、羽目板は火法の着いたところだけが黒焦げの程度で火災は起してゐない。ガラス戸は爆風によつて殆んど破れてゐる。なほ十メートルの地点に供試された兎は半身に火傷を負つて痛死の重傷を負つたが、二十メートルでは数ヶ所の火傷を負つた程度で生命には別害がなかつた。



黄燐五十キロ弾爆発後十メートルの地点に供試された雨戸、ガラス戸の被害状況



黄燐二十キロ弾爆発後十メートルの地点に供試した衣類の被害状況



黄燐二十キロ弾爆発後十メートルの地点に供試した衣類の被害状況



黄燐二十キロ弾爆発後十メートルの地点に供試した衣類の被害状況

て各建物毎に延焼十五坪未満は百リットル（五斗五升）以上を、十五坪以上は概ね十坪につき五十リットル宛増加する必要がある。この外に隣組として一方五メートル以上の水を準備して置く。と同時に、多数の者が一時に力を合せて注水するため一層数多くのバケツを用意しなければならぬ。

三 大型油脂焼夷弾の消火方法

まづ燃え移らうとするところに水をかけて火焔の擴がるのを防ぎ、水に燃えてゐる箇所に周囲から逐次水をかけて火勢を抑へ、最後に着火点には濡漚または土砂を被せて消火する。消火に當つては手袋、足袋等を用ひ、皮膚を露出しないやうに注意する。

四 大型黄燐焼夷弾の消火方法

周囲に水を注ぐことは油脂弾の場合と同様であるが、着火点に黄燐が積つて盛んに燃えてゐる場合には、まづこれに水をかけて延焼防止に努め、順次小さな火點の消火を行ふ。火力の小さな火點の消火には火叩きが有効である。黄燐焼夷弾の煙は短時間の吸入では生理的に殆んど害はないが、猛烈な白煙を吐くから、消火に出動する者は濡手拭を用意するとよい。また絶対に皮膚を露出してはいけぬ。黄燐は飛散したのち木材の割れ目や釘穴に侵入して再燃するものがあるから、焼き捨てるなり、洗ふなり、削ぎ取るなり事後處理が必要である。なほ着火點附近にある大部の黄燐は次ぎの方法でこれを處置する。

五 防空待避所の設置

大型黄燐焼夷弾は破壊力を伴ふから、これによる危害を防ぐためにも重要地域の家庭にはせひ待避所を設けなければならぬ。だが、いふまでもなく待避所とは、無用の傷害を避けるとともに防空戦闘への構への場所である。従つて焼夷弾が落ちた時には被爆し出動して消防活動に着手することこそ最も肝要であるといはなければならぬ。

以上の措置を的確にのみこんでこそ大型焼夷弾の威力も恐るゝに足らず、また必勝の信念も振ひ起されるわけである。

大型焼夷弾の威力

油燐二十キロ弾および五十キロ弾を野外で爆破させ、中心から五メートル乃至十メートルの地点に置いた種々の物料に及ぼす威力を試して見る。まづ二十キロ弾では火法は七メートル附近まで飛び、五メートル以内の可燃物、即ち障子、窓等は全部着火してゐるが、ガラス戸、板戸には着火してゐない。また五メートル以内には供試された兎は軽い火傷を負つた程度であり、十メートルの地点では異常な状態がなかつた。次いで行はれた五十キロ弾の試験では火法は十一メートルまで飛び、五メートル以内の供試材料は全部着火、兎は半身に火傷を負つた。



油燐五十キロ弾爆発後十メートルの地点における状況



油燐二十キロ弾爆発後十メートルの地点における状況



平屋六疊の間に油燐五十キロ弾を炸裂させ同室の待避所に見を供試したところ、この兎は一部に火傷を負つたが生命に別害はなかつた

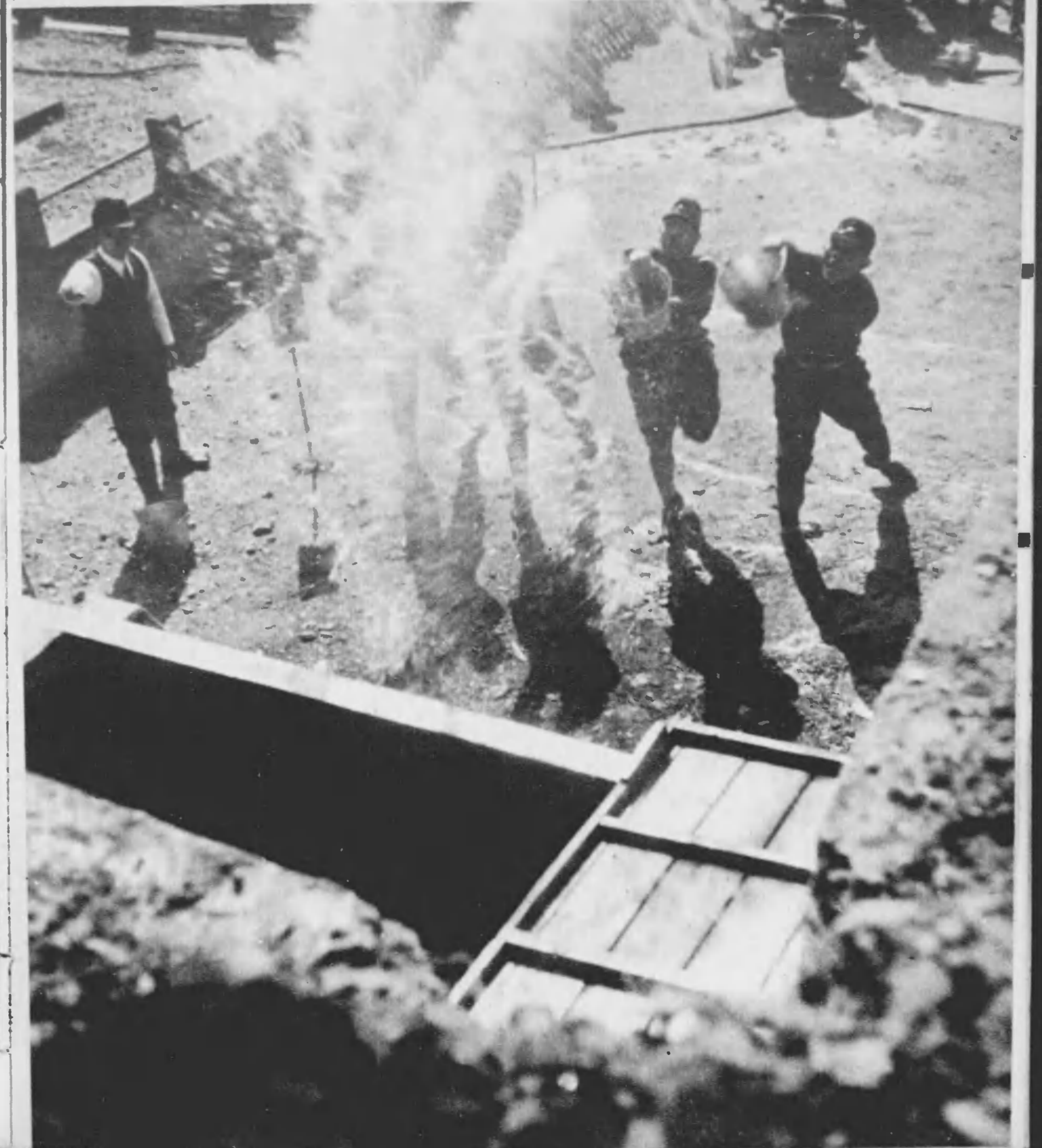
防空指導者の養成

長崎縣防空學校



人口稠密の大都會が、軍事施設とともに直接空爆の對象となることは當然のことである。いま全國の主要都市には、大日本防空協會と各地方廳の手で、防空強化のための組織的な防空學校が續々と開設され始めてゐるが、長崎市にある長崎縣防空學校は、全國に冠して、すでに昭和十五年に開設され、設備、内容ともに日本一の防空學校として折紙をつけられてゐる。

長崎縣は支那大陸に最も近接してゐるため、大陸非占領地域からの敵空軍の進攻に對しては最も警戒しなければならぬ位置にある。だが、防空を強化するためには、先づ防空戰士の大



量養成が必要であり、これら養成された指導者を通じて、隣組の末端にまで防空を浸透させることが、何よりの早道であるといはねばならない。

長崎縣防空學校はいち早くこゝに着目して設けられたもので、これまでに四千名近い卒業者を防空陣營の第一線に送り出し、防空技術の向上に大きな成果を収めてゐる。

この防空學校は、長崎縣警察部長が校長を兼任、教官には陸軍將校、長崎醫大教授をはじめ、縣警察部の幹部がこれに當るほか、専任職員數名を置き、主として市町村吏員、警察官、警防團員、町會長、隣組長等民防の指導者を對象に、一回七十名程度を収容、防空理論、防空消防、防空監視、警報傳達、燈管機要、救護、防毒、防弾等にわたつて、四日間から六日間の教育を行ひ、搖ぎない民防の確立に必死の活動 を續けてゐる。

撮影 田中 善徳
長崎縣防空學校

止血帯の結び方—先生は醫大教授の指導中尉との
訓練は太陽を背にして侵入し
緊張する防空



飯り握る護を空

練訓出炊常非の團年青子女屋古名

器具點檢を終つて出陣
命令を待つ乙女隊



乙女隊は、炊飯を始める。土の熱さを破つて薪の汗野に、



チロ／＼と燃える薪、熱やかに立上る炊煙、もう美味しさうなご飯が炊つてきた。



甲斐々々しく薪や土を振りまきながら、かくなれはお手のもの。見るとまに



非常時の炊出しは私連の手で、名古屋女子青年隊幹部百二十名は寒風吹きすさぶ雑木林に進軍、名古屋大塚田博士の指導の下に、調理、調味方法、時間、栄養と非常炊出しに必要な知識とこつを得得しました。あくまでも實戦に即して、自然の地形を利用して煙をきづき、あり合せの材料を生かした副食物と、銃後の兵站線を承る乙女の意気も高々と、敵陣來れの自信を深めました。

撮影 山田 新治





雛祭

京東



この相模会は今年の雛祭は、雛組でしませうと相模会友を呼びつけ、ここに雛組お人形さんです。お人形さんを作るのはお姉ちゃんたちです。

雛祭といつて昔ながらの雛壇つたのではありません。飾られた雛壇の花です。すべてがひびつくされてゐます。



小布瀬さんの会場をめぐって、めいめいが趣向をこらして作ったお雛さまやお人形、さては手風琴までがびんびんと弾みます。

雛壇に飾られた手製のお人形やお雛さま、お雛さまのお母さんのお指図を受けて、お雛さまのお兄ちゃんやまの兵隊さんに送られます。



私どもは祖から幾つもの美しい行事を傳へられました。雛祭もその中の一つです。しかし、今までのやうに華美に流れた雛祭は、國を擧げて戦つてゐる現在には、あまり相應しいものとはいへないでせう。

雛祭に現れた女の生活は、かくありたいといふ心の願ひには變りありませんが、大日本婦人會本部では、決戦下雛祭の一つの例として、雛組單位の雛祭を奨励してゐます。

これは雛組または班の中から適當な家を一新会場と決め、各家からお雛さまやお人形、或は手製の雛人形を持寄つて、子供たちの將來を祝ひながら雛組の親睦をも兼ねた楽しい集りにしようといふものです。まことに決戦下に相應しい雛祭ではありませんか。

こゝに掲げたお雛祭は、東京市小石川區豊川班第十二雛組の子供さんを中心にした雛組の雛祭です。

雛壇にはお手製のお雛さまやお人形が、案外市中にも淑かさを湛へてゐます。その前にお母さまやボク、ワシたちが合奏で、お姉さんの手風琴に合せました。お母さんたちもそれに合わせました。



戦場川通信

第一の通信 齋藤 芳郎

第一信

十二月二十六日

お母さん

私等砲兵部隊は今日の午後四時頃こゝまで行軍して来ました。到着した時はまだ陽は高く、厚い霧や稀薄な煙を突き刺してじりじりと地面を灼きつけています。だが、この子狐を捕まねばならぬ。あつたつかり暗くなつて、淡い月光ではの明も奪られてゐる空と、黒い地上の密林の連なりが、まるで子供の紙細工のやうに荒々しく、然りと一線を劃してゐるのがあるだけです。先頭までそこ中にもろくしてゐた飯盒炊爨の赤い朝や、兵隊らの話や、雑沓な足音や、或はは明の食中準備のたのみの光を細かい音などもばつたり絶えて、今まで全く静かになつた虫の鳴き聲が、闇の中から急に立ち出して、深い静寂を快く刺させてゐます。

暗くなつてから風が出てきました。この加害の五百メートルほど前方は海になつてゐる、風はそこから起り、潮の香を含んで静かに密林の上を渡つて、すつと平野や丘陵の方へよつてゆくの。密林のゆつたりした重々しいさめきさめき、どこか遠くの海鳴のやうにも聞こえます。

こゝの海岸には私等の部隊の一部が今日少々の休息をとり、たゞに静まりかへり、船よこゆるぎもありません。

私等は朝ののんびり寝ておきました。今日中に工兵が特殊用の橋を造り、明日兵隊の橋渡しを行ふ予定なのです。私等は甲板上に出て、朝の静寂を眺めてゐました。海は静かに揺れて、砂浜に砕ける波が強烈な太陽に射られて、灼熱した無数の星のやうにきらめく有様を見つめておりました。

砲子の密林の間に集居する民家に、素つ裸かの兵隊が出たり入つたりしてゐるのが見えました。橋を造つてゐる工兵なので、潮の突端の小高い岬に、赤い屋根と白壁の洋館が二棟、燦然と陽光に輝いてゐましたが、早上には既に我が海軍旗がゆれてゐました。

大きな窓の傍つもある二階建ての大きなその建物は、周囲の砲子の密林や住民の小屋など、際立つた対照をしておきます。その直ぐ脇に、破壊された油タンクらしきものが三つばかり、激しい勢いで煙を噴き上げてゐます。

丁度十時頃でした。甲板に出て、真向ふの海岸まで何キロあるかと目測を合つてゐた私等観測手が、五百メートルばかり離れた横合で、凄まじい破壊音の轟いた音を聞きつけました。機銃の音、砲撃の音、中隊あたりから砲撃を噴き出し、その部分から一つに割れて次第に沈没しかけてゐるのです。濃霧の霧が全精力で近づき、絨けさまで三、四發の爆雷を海面に投げつけながら、不敵な敵潜水艦を機外に急迫して行きました。

船は船首を後尾をきつと向きにあげ、突は徐々に根本を海面に近づけてゐます。一瞬間の出来事でした。

ボートが揺られ、それに兵隊達が乗込ん

の午前中に上陸、サンフランシスコに上陸した私等と集合したわけですが、私等と二日前に歩兵先遣部隊が上陸した時は最早敵影がなくなり、船と機銃をもちに占領したのです。成程私等が到着した時は、道路も家も密林の中をひびく汚れ、敵の食糧庫も破壊された空気が、散らばつてゐる感じが、強張りしたものは見当りませんでした。

こゝへ着くと直ぐに、私等は自分の分隊の車輪の埃を掃き、ラヂオエーターの排水をし、ガソリンを注入し、明日の行軍のため一切の準備を整へてから、村長の和田佐長が指定してくれた民家に各自宿することになつたのです。

私等観測手の宿営と決つた民家は、トクンと板敷の小さな民家でした。床が四尺も高くて、入口には階段が設けてあり、まづ敵の影には困らないね、と、いち早く床下に積み重ねられた枯木を見つけた神田兵長がいひました。室は二つに仕切られ、奥の方に窓があり、そこだけは床に藁を並べてありました。私はこの家の住人が農夫なのか、或はは勤人なのか、皆目見當がつきませんでした。といふのは、この粗末な造りの家の二つの室は、なかなかこざつぱりしてゐます。まづ歩きながら、

の室の一隅に、てかくと樹脂の塗られた、素晴らしく立派な家具の戸棚がありました。大きな室には四脚の頑丈な造りの藤椅子が置いてあり、そしてそれらにみよ、かなり手のこんだ組合せ方をしておるのです。

藤椅子がすつかり氣に入つた神田兵長は、その中の一隅を窓際に持ち出し、それに半裸の體をふんぞりかへらして、隣の家に、おいと音をかけたもので、隣の家に陣取つてゐる通信班の者等に、こんな藤椅子などぞつちにはあるまい、と言ふわけなので、とると隣ののかなり大きなものを二階建ての床下には馬車の壊れたのが昔の様に立てかけてありました。の中で、しきりに汗を拭いてゐた佐藤上等兵が、ふふと鼻を笑つて置いてから、音を消した。だが、聞えなく窓際に置かれた、大抵の音を両手に高く差上げるので、そしてにや、笑ひながら、それに俺のボートは寝違ひだぞ、と叫び、ちよつと待つて、いゝものを聴かしてやるから、と言ひ捨てて音を消しました。やがて二階から音やかな、美しいピアノの音が響き出しました。私等は半ば驚き、半ばあきれながら、機銃上等兵が幾度もこもや、と調子を亂しながら音が続いてゐる稚拙な童謡の一曲を、じいつと聴いてゐました。

私は裏手の井戸で水を汲み、皆と飯を炊きながら、こんな見事な家、こんな生活してゐる住民とは、如何なる人間であらうかと考へてゐました。

お母さん

私の側に横になつてゐる十四人の観測班の戦友等は、簡単な日記をつけてしまふと、

病室をへて病室に運んで行くのが見られ、

向いて負傷兵の蒼白い顔から涙が、か

なり長い息を吐き出されて来たこと、

私、お母さん、お母さん、お母さん、

お母さん、お母さん、お母さん、

お母さん、お母さん、お母さん、

直ぐ寝ついてしまひました。大きな窓からは風が吹き入つて蚊帳をゆらゆら動かしてゐるものの、密林や大地のぬもりがひしひしと迫つてきて、とて暑くてやりきれません。しかし、戦友等は今日一日の行軍に疲れた上に、昨日上陸直後、全部が苦しめられた死ぬ程の腹痛の後の倦怠で、ぐつぐつと眠つてゐます。皆腹をこつと毛布の上で大の字になり、私の枕元のちよつと頬に照らされてゐる汗だらけの頬が、想像のやうに固い明暗をつくつてゐます。

死に際の腹痛、と言ひましたが、上陸早

早で、一度も敵と交戦せぬ中に、全くの自分自身の不注意によつて危く生命さへ奪はれさうになつたことが、私には殘念で残念でならないのです。若しあのまゝ、もつと中隊がひととて息絶えたら、私は、涙を流し、立派な働きをしなさいといつて送つて下さつたお母さんに何んとお詫言し

二十二日の午前三時に、私等の船はリンガ

エン島の丁度中央あたりに侵入したので、

が、私等は、前日さうと聞かされてゐるなが

ら、明け方まで船の汽機が止り、絶えず船

をゆさぶる波の音が遠のいたのにも氣付

かず、ぐつぐつと眠つてゐたのでした。

私等より数時間早く島の奥深く侵入

した艦隊(主として歩兵)の船隊からは、

暗夜に砲撃を繰り返して上陸し、附近の敵を

掃蕩しつゝおりました。私が對潜監視哨の

交代で甲板に上つた時は、既に艦隊は海岸の

かなり奥深くまで進出し、銃聲は殆んど

絶えてゐました。

空は薄青く曇み、空氣はやはりかく霞んだ

静かな朝でした。海は遠く眺めると、重

なり合つた船の煙突の煙が、どこか工場地

帯のやうな錯覚を起させるのです。湾内は

は私等の橋渡作業のため昨夜から徹夜を續

けてゐるのですが、八時までの完了の豫

定が九時になつても何んの報告もないの

です。

工兵隊の作業は夜も續けられました。双

眼鏡を眺めると、海岸には幾つもの煙が、

その炎に裏つ裸かのやがとつたりと浮び上つ

てゐます。その工兵隊の遙か後方の砲子の

密林が、青から赤に赤く染られました。

しかし、今朝は早く連絡に来た三名の工

兵は中隊長に、正午まで待つていたときま

す、と残念さうに言ふのです。昨夜私等は、

若し機銃が明日の朝までに出来なければ

構は、海を泳いででも橋渡ししようと思ひ

合つてゐたので、では工兵に協力させよう、

と中隊長に言ひました。

中隊長の許可を得て、私等のうち、砲兵

隊の全員と指揮小隊の観測班だけが装具を

つけ、舟艇に乗り込みました。工兵は三名

ともふんどし一つになり、汗と泥で體がど

す黒く汚れてゐました。まだ朝飯も食はな

いのですよ、と三人は笑ふのでした。

橋渡し地帯附近は、かなり廣い、なだらかな

砂丘になつてゐました。砂は均けてゐる

ので、地下足袋の裏は刺すやうに熱い。

私等は素の裸かになり、工兵隊と一緒に作

業を開始しました。船から運んだ材料では

十分でないで、工兵の一部は密林の中に

分け入り、砲子を代り倒しました。その装

束、丸太のま、海中と砂丘に敷きつめ、

路を造るのでした。

翌日は朝のうち、遠くでしきりに機銃砲

らしい音が響いたが、それがやむと私等は

初めてひどい焦燥に捉はれました。昨日

中には砲隊の砲などが上陸を完了し、

変わったの、私等重機械化部隊だけとなつた

のです。九時、待ち切れなくなつた中隊長

は橋渡し地帯の偵察に起きました。工兵隊



暮れ方まで、後続の各部隊が絶え間なく舟

艇で進發して行きました。甲板で船員が盛

んに手を振り、口々に何か叫んでゐます。し

かし、舟艇の中にきこえんとする、前方を凝視

してゐる兵隊等は最早や誰一人として振向

きません。そして、その舟艇が再び橋渡し

に歸つてくる時は、頭や手に糊着した負傷



比島俘虜人懐郷の郷へ

押へきれぬ喜びはあふれて、教育隊の喜びはつきない

懐しい牧草所をあとに、それぞれ故郷にかへる俘虜たち

撮影 来住野壯三



を操縦せねばなりません。即ち、では私は等はずっとマス附近に操縦した一部に追いつくやうに命令されてゐるので、輸送船が最大限速度に寄せられました。それでも千メートルはたつぷりあるのです。一隻の舟艇から二隻の舟艇を押しあげた後は、海水に半身を浸らせながら、大きな舟艇の近づく僅かな時間をじりじりとした気持ちで待つてゐます。前線が一刻々々私等から遠ざかるといふ意識は、曲げしめても足りない無難なものです。

夜になりました。海岸のまことにまたたく鉄の数は昨夜よりも遙かに少なくなつてゐます。既に直接の機銃部隊は大部分、重間の中に上陸を完了したやうです。闇の海上から流れてくる機銃の響きは、どうやら私等の船のものだけらしい。

船に残つてゐた隊員の者が夕食を持つて来たので、私等は交代で食事をしました。そして、枯木を集めて砂丘に火を焚き、排煙を続けました。熱を放散した砂丘は、しかし何か人肌のやうに生きたかかです。

丁度八時頃、観測班の天花上等兵と辻上等兵が同時に腹痛を訴へ始め、二人とも海からあがつてくるなり、砂丘に倒れるやうに倒れ、胸を押へて唸りました。どうしたのだと尋ねると、何か知らぬが恐ろしく胃が痛くてたまらぬと言ふ。中隊の衛生兵を呼ぶと、中毒らしいと言ひ、直ぐ砂丘の陰の窪地に連れて行きました。間もなく倉島上等兵と萩原も腹痛を訴へ出し、標かのまゝ窪地へよろめいて行き、武藤上等兵、神田兵長も次ぎ／＼に窪地へ這つて行くのです。私は薄気味悪くなつたので、海中と陸上の作業を交代して貰ひ、濡れた體を拭き、腹を締めました。冷えたのが不可なりと思

つたのです。しかし、再び私が装具置場から砂丘を登つて行く途中から、ちくり／＼と胃のあたりが痛み出し、そして何となく舟艇の背後に手をかけて、砂中にスリッパを押し上げようとした瞬間、かつと胸元から突き抜けてくるものに目がくらむやうな感じがした。私は高い星がまぶさしと一瞬したやうに感じ、その場に倒れて、名状することの出来ない不快な嘔吐感と、じつ／＼と吐きながら、私は胃の上のところに刺さるやうな激しい痛みを感じました。

これと同時、上り／＼と吐き始め、あまの痛さに不甲斐なく、その場に立陣してしまひました。三村上等兵が直ぐ私を抱へてくれました。舟艇の進む端に倒つてゐる譯にはゆかないのです。私は腹を吸ひしぼつて起ち上りました。そして砂丘を上つて窪地へ行かうとしたが、間断なくさしたこんでくる苦痛に阻まれ、一歩も前に進めないと同時に、私を抱へてゐた三村上等兵もそのまゝげろ／＼と吐き始めるのです。

窪地では、皆素つ裸か、まゝ砂上に倒れて、掌を握り、或は砂の中に両手を突立てながら、身を凍め、苦痛を堪へてゐました。軍醫は衛生兵の持つたらふそくの光で私と三村上等兵を一瞥すると、私の腕をしっかりと押へ、いゝか、夕食の牛肉の罐詰の中毒だ、直ぐ快くなるから我慢するんだぞ、と力をつけるのです。衛生兵が注射の用意をする間、私もほかの者も、窪地中のたうちを廻り、唸り聲をあけました。苦痛はいよいよ／＼募り、私は五感が無感覚になるほど熱を帯びてくるのを感じました。しかし私は、苦痛で視力も感覚も奪はれなが

ら、意識は妙に鮮かに眼覚めてゐて、絶えず、こゝは戦場だ、こゝは戦場だ、と叫んでゐるのでした。そしてその叫び聲が恐ろしい勢ひで私を絶望に陥れました。死の想ひがちら／＼としました。死んでなるものか、私の直ぐ頭の上を、砲車や車輪が、ぐわ／＼と車輪を響かせながら、砂を蹴たてて進んで行きます。車上や牽引車の座席で、戦友等が緊張した顔と顔をつき合せ、興奮した語調でしきりに何事か話してゐます。あゝ私は取巻かれるのだと思ひ、私は絶望しながら、それでも必死になつてその後を追ひかけようとした。

臀部に麻酔針を注射して貰ふと、漸く苦痛が薄らぐのを覺えました。私等はのろ／＼と窪地を這ひ出し、とある一軒の原住民の家に入りました。高い床に這ひあがると、私はその竹を釘でもつけた三、四段の梯子から幾度もする／＼と降り落ちました。原住民の家は二間四方ぐらゐの竹造りのあばら屋でした。床は竹を細かく割つて敷きつめ、壁と屋根は椰子の葉らしく、その壁には古ぼけた聖母の版畫が二枚掲げられてありました。空に入ると直ぐに、その版畫がまるで待ち構へてゐたやうに私の膝を射たのです。空には家財は何一つありませんでした。隅には汚れた土器が幾つか並べられてあり、何んとも知れぬ強烈な腐敗の匂ひが鼻をつきます。私等は竹の床に一枚の毛布を敷いて、砂だらけの體を横たへました。

麻酔針が薄らぐと、再び苦痛が腹を掻きむしつてきます。私は轉がるのを防ぐため、両手で床の竹をしつかと握り締めました。衛生兵が附きつきりて何度も注射してくれました。

真夜中に兵器全部の搬送を完了した後、

中隊長や、指揮小隊長の柴田中尉や、通信班の連中が小屋の中に這つてきた時に、私等は小康を得てゐました。しかしいくら努力しても、誰も一尺と起き上る氣力がありませんでした。

私は疲勞困憊した體を床の上に横たへながら、衛生兵の聲を聞いてくれば、くぐの淡い光で、壁の古ぼけた聖母の像を見てもなく見やり、譯もなくぼろ／＼と無念の涙の溢れ落ちるのを止めることが出来ませんでした。

× ×

お母さん、こんな私のみじめな苦痛の有様を読んで立腹せう。書き續けてきた私自身でさへ、漸く生き復つたことのがびよりも、こんな馬鹿げた苦痛に耐えられたことが口惜しくたまらぬのです。でもお母さん、私はお母さんになつた一言語りたいたことがあります。

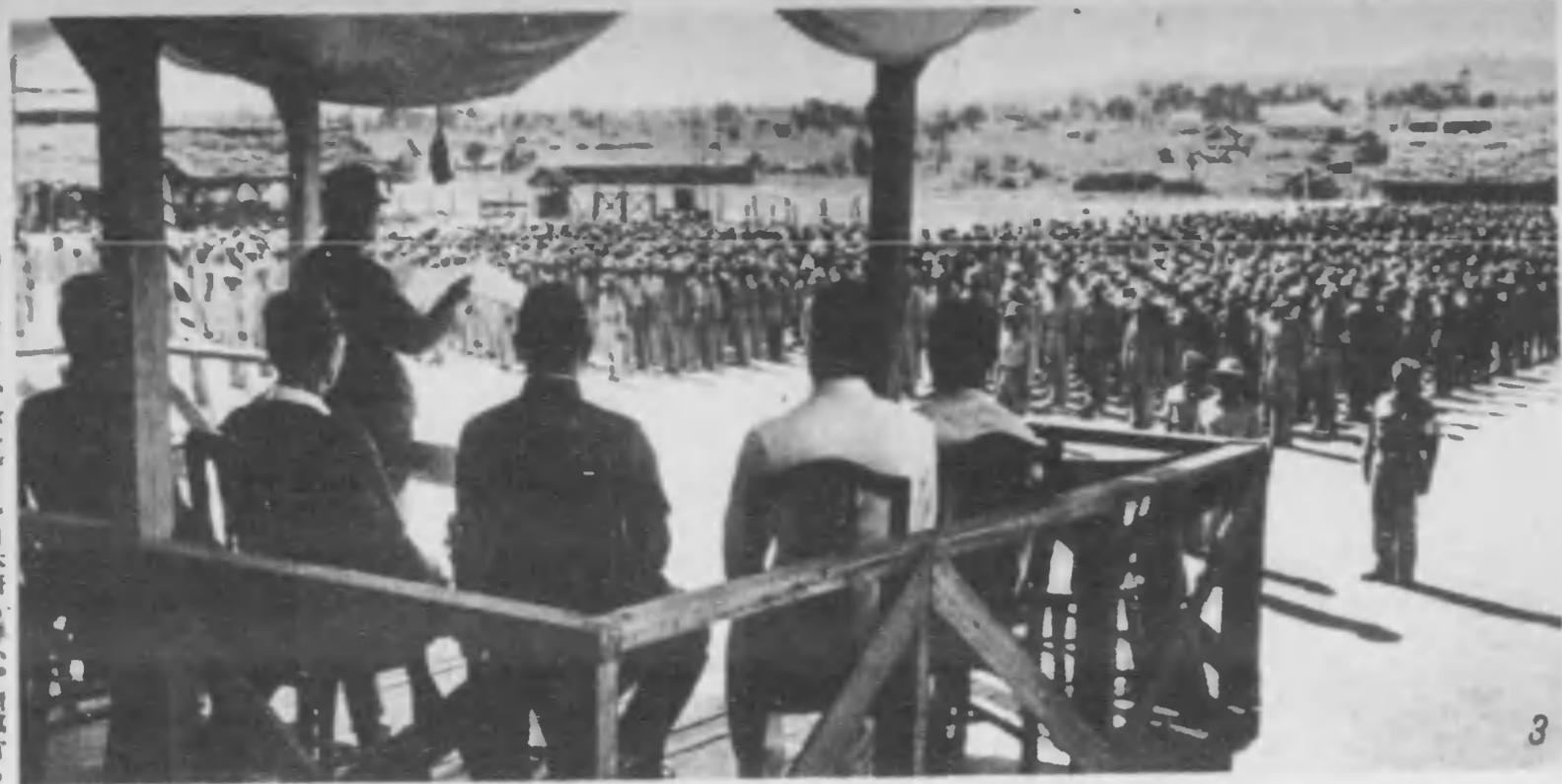
それは、一人の兵隊が戦陣中、敵陣にあつて戦死することが、それだけでその兵隊が立派なのではない、名譽なのではない、といふことです。彼が或る戦陣で、萬歳と叫んで息絶えるまでは、行軍で、或は射撃で、或はほもつとそれ以前の行動において、如何に苦しみ、如何に死を準備しつゝあつたことせう。私が腹痛で苦しむこと、これなぞ考へてみれば全く餘計なことです。しかし、私は、これから先、私の前途に待構へてゐるであらう皆さんの戦陣のことを想像する時、そして私が若し陣にあつたお母さんのお志に報い得る瞬間のあることを想像する時、さうした餘計なことがらも、決して餘計なものではないと思はれるのです。

——つとく——

大分県大津町の正設つかめ 熱心な防空教育の展開ぶり

水こそ火災を必滅する弾丸だ。高津水の猛襲

標本室はまるで防空科の博物館だ。豊富な資料にとりかこまれて



1「さあ、これからだ」修業證書を手にして、決意を語り合ふ
2オールドネル教育隊の修業證書
3参謀長代理の懇切な訓辭

「サヨナラ、バンザイ」日本語も鮮か。招旗官も



フィリピンの獨立は、決議會劈頭の東條内閣總理大臣の力強い聲明によつて再認識された。「フィリピンが更に積極的な協力を重ね、フィリピンの獨立がなるべく速かな時期に實現せんことを衷心から期待するものである。」この一語、一語がフィリピン全民族に與へた歡喜は大きい。アメリカの鐵鎖は絶たれた。しかも、やがて『東亞共榮團の一員』としておほらかな將來が約束されたのだ。アメリカの物質文明に奪められた心、物、形をかなぐり捨ててアジアへ復歸、更に獨立への強力な決意が、いまフィリピン全土を蔽つてゐる。

このほど比島兵俘虜最後の釋放として、約八百名が比島再建の意氣も高く、オールドネル教育隊を編立つた。惡鬼のやうな米英に追ひまはされて抗戰の銃をとつたのもいまは夢、教育隊の訓練で、精神も、身體も、そして日本語も驚くほどの上達ぶりだ。息遣の手厚い待遇に心から謝辭を述べ、足どりも軽く故郷に急ぐ彼らの喜びこそ、フィリピンそのものの姿であらう。

各隊には婦人會も出動して、親切なもてなし喜びは一層深い。

椰子の島 椰子の実から

こんなに色々なものができます



パシフィック河を下つて椰子の實がマニラの加工場に運ばれる

山と積まれた椰子の實はまづ一つ一つの殻を割られる



フィリピン群島の半分が椰子林であるといはれるやうに、同群島における椰子加工業は産業経済の中心をなしてゐる。日一日と治安の回復してゆく昨今のフィリピンでは戦前にも増して椰子加工業が盛んになつてきた



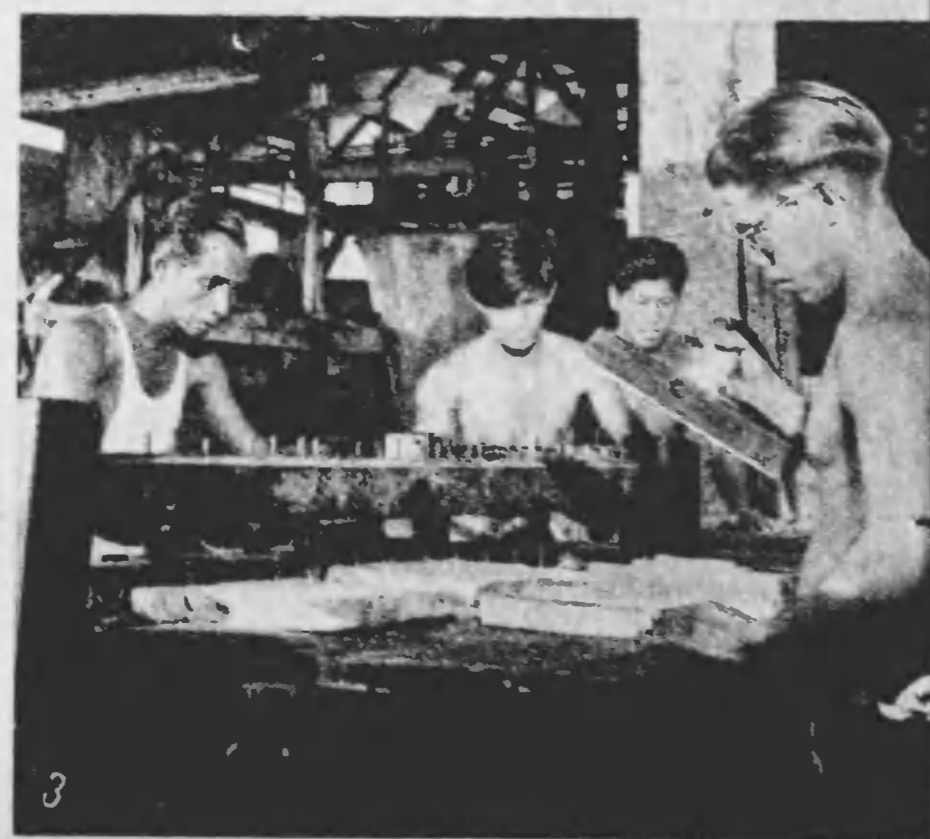
▲椰子の實—ココナツは三つの實に分けて加工される。一番の外皮は非常に強い繊維から成つた綿状のもので、これをペラペラにしてタハンや繩に纏つてマット及び袋を作る。二番目の皮は厚さ五ミリ程の硬い殻状のもので、木炭の原料となり、そのまゝ、食器などにも利用されてゐる。三番目の



乳質の部分こそ加工業中の生命ともいふべきもので、これをそのまま絞ればココナツ・ミルクがとれ、これをいぶしてコブラとし絞ればココナツ油がとれ、食用油となり、石鹼の原料ともなる。絞り粕はおいしい菓子の原料になるといふやうに、ココナツは捨てるどころの全くない果實である。また南方に作戦中の皇軍勇士の灼熱に焼けた咽喉を潤ほしてくれるのも、このおいしいココナツの汁であつた

撮影 石田永次郎

- 1 乳質の汁は絞られ、脱脂された。これがお菓子の原料となる
 - 2 おいしさうなココナツ・ミルクが造られてゐる
 - 3 コブラから石鹼が製造される
 - 4 椰子の實の繊維からはて置のやうな繩子ができる
- ↑ コブラから絞つた食用油は所飲いまでに並べられた



米英を



米英を
僕等も敷手てる
切手買ふ

抽籤の済んだ切手は五枚以上まとめて郵便局へお差出しの上、特別
据置貯金證書と引換へて下さい。

寫真週報
(禁轉載)

昭和十八年三月
三日印刷發行

編輯者
情報局

東京市墨田区
水田町一ノ区一
番

印刷者
内閣印刷局

東京市墨田区
東馬場町四丁目

發行者
内閣印刷局

東京市墨田区
東馬場町四丁目

定 價

一部十錢
(送料一錢)

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲特大號の場合は
其の都度御申込
金より差額を申
受けます。

▲特約新聞希望
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

▲郵政特約新聞
の方は一割十錢
(送料一錢)の割
合を以て前金を
送へ御申込み下
さい。

内閣印刷局印刷發行

本紙の印刷はA4判用紙に於て行はるる。

寫真週報 昭和十八年三月三日 第三千四百九十九号 郵便番号 東京一四六四二番